

京都大学	博士（文学）	氏名	金 宇大
論文題目	古墳・三国時代における朝鮮諸国および倭の相互交渉		
（論文内容の要旨） 本論文は、古墳・三国時代の日本列島および朝鮮半島諸地域における地域間交流様相の一端を、墳墓から出土する考古遺物、特に金工品の分析から解明することを目的とする。 古墳時代の日本列島はいわゆる「初期国家形成期」、すなわち首長制社会から「国家」としての社会へと成熟していく段階と位置付けられている。特に、古墳時代中期における手工業生産の革新以来、社会の構造的発展は加速度的に進展していく。そうした国家体制成熟を実現させた要因のうち、とりわけ重大なファクターの一つが、朝鮮半島各地との交流による文物や資源の流入であった。鉄素材や先進文物、各種技術の導入は、器物の授受を介する倭王権の地方経営の在り方に直接的な作用を及ぼし、古墳時代社会の内的発展に極めて大きな影響を与えたと推測される。ところが、列島内部における様々な動向の分析を土台とした古墳時代社会論が極めて精緻な水準へと議論を進展させている一方で、列島外部との交渉それ自体の分析は十分に検討されているとは言い難い状況である。古墳時代社会の発展過程を論じた種々の研究においても、半島交渉への言及は具体性を欠いた曖昧な内容に留められることが多く、1970年代以前の古代史研究の枠組みを無批判に継承し、先進文物導入の大きな契機として朝鮮半島での倭の軍事的活動を想定する見解も依然として散見される。 他方、当該時期の朝鮮半島は、高句麗・百済・新羅の三国と加耶諸国が分立する「三国時代」にあたり、地域間でしばしば激しい争いが勃発する緊張状態が続いていた。このような緊迫した情勢において、海を隔てた「倭」との関係構築は、隣国との交渉を有利に進める上での一種の抑止力として機能したものと推測される。つまり、朝鮮半島側からの視点で考えてみても、倭との関係を維持することは自国の利益につながる重要な事業であった。日本列島出土の「渡来系」とされる各種遺物をみると、いずれも多様な系統の資料が混在する状況を示しているが、このことは朝鮮半島各地の集団がそれぞれ倭との関係を結ぼうとしたことに起因すると考えられる。こうした様相からは、従来の半島から列島への一方向的な文化伝播という在り方でなく、倭と朝鮮諸国それぞれの相互的な利害関係を前提とした交流の実態が垣間見える。しかし韓国の学会では、新羅や百済、加耶といった一地域の研究を専門に取り組むのが一般的で、他地域を一律に扱って地域間の関係を総合的に論じる研究は極めて少ない。 このように、当該時期における地域間の交流を考える上では、各地域の政治勢力を並列的に捉えつつ、日本列島と朝鮮半島を包括した一領域内における地域間関係像を			

再構築することが急務である。こうした研究課題に対し、本論文では、各地域の墳墓に副葬された金工品の考古学的分析を主な方法とするアプローチを試みた。ここでいう金工品とは、金や銀といった鉄以外の貴金属を用いた装飾をもつ器物を指し、具体的には、冠や耳飾、帯金具などの服飾品のほか、装飾付大刀や装飾馬具などがこれに該当する。金工品の加工には、非常に高度で専門的な技術が必要とされるため、その製作は土器や木製品、あるいは鉄製品と比べてもはるかに限定された単位でおこなわれていたと推測される。組織的に管理された専門的な技術者の確保に加え、材料となる貴金属の入手そのものの困難さから、その継続的な生産には高度に集権的な社会構造が不可欠であったと考えられる。

古墳・三国時代において、金工品が本格的に墳墓の副葬品として副葬され始めるのは、5世紀代に入ってからである。中でも新羅圏域において、冠や耳飾、帯金具といった金工装飾品が多量かつ広範に出土するようになる。これらは、新羅の服飾制度に関連して中枢勢力から地方首長に配布されたものと指摘されている。すなわち金工品は、新羅における間接統治の重要な媒介物であると同時に、その階層的権力構造の象徴物として機能していた。もちろん新羅だけでなく、周辺の百済や大加耶においても、同様の脈絡で金工品が流通しており、これらの一部は倭国すなわち日本列島にももたらされている。一方の倭も、専ら金工品を受容するのみではなく、金銅装眉庇付冑や装飾馬具などをはじめとする金工品を列島内で盛んに生産していた。

当該時期における金工品は、単なる奢侈品の域を超え、新羅や百済といった権力集団の中枢が圏域内の地方統治を間接的に進めるための媒介物として政治的な意図のもと製作・配布されていた。逆に言うと、金工品の流通様相や製作技術の伝播・拡散には、当時の政治的な意図が如実に反映されている。したがって、当該時期における地域間の政治的関係を窺う上で、金工品の分析は極めて有効なアプローチといえる。

以上のような問題意識を前提に、本論文では、2部9章にわたって、特定の金工品に着目した検討を実施した。

第I部では、「垂飾付耳飾」を主な分析対象とした。垂飾付耳飾は、各種金工品の中でも最も普遍的に流通した装飾品の一つである。5世紀以後、新羅や百済、大加耶において、それぞれ特有の意匠をもつ耳飾が製作・配布され、その製品や製作技術は倭にも移入された。熱処理技術を駆使した立体的な造形や鏤金細工は、数ある金工品においてもとりわけ製作難度が高く、高い技術を有した専門工人組織による限定的な生産体制が想定される。

第1章では、朝鮮半島の洛東江以東地域、主に新羅の圏域であった地域から出土する耳飾を検討した。当該地域は、古代東アジアの各地域の中で最も垂飾付耳飾が普及・流通した地域であり、多種多様な耳飾が大量に製作された。そこでまず、新羅圏域内における広域耳飾編年を詳細な属性分析によって設定し、他地域における編年的検

討においても参照し得る基準軸を確立した。同時に、周辺地域の耳飾と比較することで、新羅における耳飾変遷に画期について対外的な視点から評価を試みた。新羅における垂飾付耳飾製作は、5世紀初頭、高句麗からの工人流入によって開始される。社会的成熟を背景に高句麗への従属状態から脱却を試みた新羅は、周辺地域、主に百済との関係を深化させつつ圏域内の間接支配体制を強化、耳飾製作も大幅に拡大される。6世紀に入ると、州郡制の導入にともなう地方支配体制の変化に伴い、耳飾製作は縮小される。

続く第2章では、他地域の垂飾付耳飾の分析へと入る前に、金工品製作体制の在り方についての認識を明確にした。新羅圏域内の各地方で発見される金工品が、中央の限定的な工房で一元的に製作・配布されたものであるのか、地方においても同水準の製品を自家生産し得たのか、という点について検討するため、新羅と大加耶との境界地域にあたり、出土金工品の在地生産が指摘される昌寧地域を対象に、実際の各種金工品の出土事例を通覧しつつ中心的工房以外での金工品製作の実態について探った。昌寧地域では、独特の意匠を有する帯金具がまとまって出土しており、銀製帯金具の部分的な在地製作がおこなわれていた可能性は高い。板状素材への加工、切削、彫金といった工程をとまなう帯金具や冠などの平面的な装飾品は、地方でもある程度製作が可能であったと推測される。一方で、金製素材で、緻密な熱処理工程を必要とする耳飾や、鑄造によって細部を成形する装飾馬具については、現時点で在地製作を積極的に認める材料は不十分であった。こうした複雑な構造を有する金工品は、原則的に中枢の工房からの配布品と評価される。昌寧地域の特異な金工品は、多くが新羅意匠の影響を受けた大加耶製品が混入したものと考えた。

第3章では、大加耶出土の耳飾を対象に、編年と系統的整理を中心とした検討を試みた。また、百済の耳飾についてもその特徴を大まかに整理し、大加耶と百済の資料間の共通点と相違点を比較して、技術的・意匠的な関係について考察した。大加耶の耳飾製作は、新羅や百済よりやや遅れて開始される。しかし、その技術水準は次第に高まり、5世紀の末頃には周辺と新羅や百済と比較しても遜色のない程度となる。このころの大加耶耳飾は、主に新羅の意匠の影響を強く受けている。新羅での金工品配布を媒介とする間接統治体制の発達を受け、大加耶における金工品製作の機運が高まっていたためと考えられる。6世紀に入ると、山梔子形系統耳飾の出現とともに大加耶的な意匠・技術が確立され、耳飾製作は最盛期を迎える。

第4章では、ここまでの朝鮮半島出土耳飾の検討成果を土台に、日本列島出土耳飾の系譜について再考した。日本列島出土の垂飾付耳飾は、朝鮮半島の様々な地域から耳飾が搬入された結果、極めて複雑な様相を呈している。本章では、列島出土の全資料を対象とした具体的な系譜検討を実施し、空球形中間飾と長い兵庫鎖の垂下を特徴とする「長鎖式」耳飾の製作地について詳しく考察した。「長鎖式」耳飾は、大加耶

系耳飾との共通性が看取される一方、細部の特徴に様々な差異が認められ、その製作地をめぐって議論が続いている。本章では、第3章での検討結果をもとに、日本列島出土の長鎖式耳飾と実際の大加耶出土資料とを比較、大加耶と日本列島における耳飾の出現時期がほぼ同時期であること、初期の大加耶耳飾で最も多い浮子形系統耳飾が同時期の日本列島で発見されていないことなどから、長鎖式耳飾を渡来工人による列島内製作品であると認定した。古墳時代中期においては、新羅、百済からごく少数の耳飾が日本列島に搬入されるのみで、大加耶からの耳飾の舶載は認められない。後期に入ると、熊津期百済や大加耶からの耳飾の流入が急増し、後期中葉には垂飾付耳飾はほとんどみられなくなる。

第2部からは、分析対象を装飾付大刀に移行する。装飾付大刀は、古墳時代後期の日本列島で大流行し、全国各地の古墳に副葬された。とりわけ環頭大刀系の装飾付大刀は、その技術的源流について百済を中心とする朝鮮半島に求め得ることが指摘されてきた。1990年代に入るまでは、韓国側に十分な装飾付大刀の出土例がなかったが、近年の発掘調査で装飾付大刀の資料数は急速に充実してきている。いま改めて朝鮮半島出土資料の本格的検討を進めることで、列島一半島間における技術的交流の在り方に加え、列島内部での大刀工房の発展過程についてもより一歩踏み込んだ検討が可能になると期待できる。

第5章では、洛東江以東地域、主に新羅圏域から出土する装飾付環頭大刀を対象に、編年を中心とした検討を試みた。当該地域では、三葉環頭大刀と三累環頭大刀という特徴的なシンボルを採用した大刀が多く製作された。5世紀中葉における新羅の社会的発達にともない、装飾付環頭大刀が金工威信財の一部として配布され始めると、大刀意匠に明確な規格性が生じ、技術が厳格に管理されるようになる。5世紀後葉になると、新羅大刀の量産化が進む中で、規格化された新羅的大刀意匠に百済や大加耶の影響が認められるようになり、周辺地域との関係性の深化がうかがわれる。6世紀になると、間接統治体制の変化に伴い、大刀の製作は衰退する。

第6章では、百済と加耶、特に大加耶の圏域で出土する装飾付環頭大刀の系譜について論じた。百済と大加耶の出土例を比較すると、大刀意匠の共通性は垂飾付耳飾よりもはるかに高い。そのため、従来、大加耶で製作された大刀と百済から流入した大刀との峻別が困難であった。本章ではそれぞれの地域に特有の製作技術を抽出し、これらを弁別するいくつかの基準を提示することに成功した。さらに、陝川玉田M3号墳で出土した4点の龍鳳文環頭大刀に1点明らかに百済的な製作技術でつくられた大刀が存在することを指摘、玉田M3号墳被葬者が生存していた頃に百済からの大刀製作技術が伝播して、大加耶で本格的な大刀製作が開始されたと考えた。その契機については、百済が熊津へと遷都した際、一時的に国力が衰退したことで金工品工人が大加耶へと流出したためと推定した。

第7章では、これまであまり注目されてこなかった朝鮮半島出土の円頭刀・圭頭刀にスポットを当てた。朝鮮半島出土資料の状況を考慮した用語・概念を設定した上で、その系譜関係を整理し、新羅の圭頭大刀には、百済や加耶の円頭大刀からの意匠的影響とみられる要素がしばしば認められることを指摘した。5世紀後葉におけるこうした動向は、環頭大刀や耳飾の在り方とも符合しており、この時期の新羅の対外関係を考える上での新たな材料を得たといえる。

第8章では、日本列島に視点を移し、比較的早い段階における日本列島での装飾付環頭大刀の様相を改めて検討した。朝鮮半島で装飾大刀が最も盛行した5世紀代は、日本列島ではいわゆる装飾付大刀の製作は認められず、専ら朝鮮半島各地からの搬入品であったと考えられる。ここでは、前章までの系譜的検討を土台に日本列島出土の初期装飾付環頭大刀を個別的に検討し、それぞれの系譜について明らかにした上で、時期ごとの様相の変遷を追った。古墳時代中期前半には、新羅からの搬入大刀がほとんどを占めていたが、中期後半になると百済から舶載された大刀が大部分を占めるようになる。後期になると、大加耶からの大刀の搬入が始まり、その他の地域からの大刀の舶載もより盛んになるが、その背景には掎じり環頭大刀に代表される倭装大刀の盛行があったことが関係している可能性を指摘した。

第9章では、古墳時代後期後半になって日本列島で流行する単龍・単鳳環頭大刀を対象とした検討をおこなった。従来、日本出土の単龍・単鳳環頭大刀は、公州武寧王陵との図像的類似から、百済に系譜を求められるものと認識されてきた。ところが、近年の研究で製作技術面において大加耶との関わりが強く認められることが指摘された。本章では、環頭部の鑄造技法に着目し、大加耶の龍鳳文環頭大刀製作工人に特有のロウ型鑄造技法が日本列島出土資料においても認められることから、大加耶の工人が列島での単龍・単鳳環頭大刀製作に関与していることを改めて明確にした。日本列島で出土する単龍・単鳳環頭大刀は、その大部分が日本列島製である可能性が高く、その製作開始時期は6世紀後葉頃となる。このことから、大刀製作開始の契機は、562年の大加耶滅亡にともなう大刀製作工人の列島移入であると考えた。列島では、大刀需要の高まりと共に大刀生産が拡大され、合範鑄造技法による量産化体制が急速に整えられた。

終章では、以上の検討結果を総合し、垂飾付耳飾と装飾付大刀からうかがわれる当該時期の地域間関係の変遷過程を改めて整理した。金工品の流通様相および製作技術の伝播の状況から、朝鮮諸国および倭の交流が、国際情勢の動きと連動する相互の利害を前提になされていたものであることを明示した。

（論文審査の結果の要旨）

日本列島における古代国家形成過程において、高句麗・百済・新羅および加耶諸国と倭のさまざまな関係が、大きな意味をもったことは、『古事記』・『日本書紀』をはじめとする当時の文献史料の研究を通して知られてきた。このことは、日本列島の各地で出土した、朝鮮半島各地にその起源を求めうるさまざまな外来系考古資料や、最近の発掘調査の進展により朝鮮半島の各地で出土した倭系考古資料を通してもうかがうことができる。しかし、古代日朝関係史を考古学的に研究するためには、こうした考古資料の時空的位置づけを明確にする必要がある。また、さまざまな先入観やナショナリズムから脱却して、当時の日本列島と朝鮮半島におけるさまざまな地域間交渉の全体像を再構築することは、日本と大韓民国の考古学者にとって大きな課題である。

こうした課題を解決するために、論者は本論文で、朝鮮半島および日本列島で出土する金工品、なかでも垂飾付耳飾と装飾付大刀を研究対象として取り上げた。これらは、5・6世紀における朝鮮半島および日本列島で広く用いられた遺物であり、他の金工品にくらべて、その製作に高度な技術が必要である点で共通する。論者は、こうした考古資料をできる限り実際に調査して、その形態的特徴のみならず、技術的特徴を検討することを通して、5・6世紀における朝鮮半島と日本列島における地域間交渉の復元を試みた。

本論文における研究成果としてまず評価すべきことは、朝鮮半島各地で出土した垂飾付耳飾および装飾付大刀の編年および地域性を検討し、その時空的位置づけを明確にした点である。垂飾付耳飾については、まず慶州を中心とする新羅領域での出土例を取り上げ、その中間飾・垂下飾・連結金具を分類し、それらの組合せの検討を通して、その系統と変遷過程を明かにした（第1章）。新羅の耳飾は、その装飾の多様性のために、さまざまな分類・編年案が提示されてきたものの、いずれもさまざまな問題を抱えてきた。そうした先行研究にくらべて、論者の今回の検討結果は妥当性が高く、今後多くの研究者によって参照・引用されることになるだろう。またその成果をもとに、出土量の少ない百済と大加耶の領域で出土した垂飾付耳飾も検討して、各遺物の時空的位置づけをおこなったことも重要である（第3章）。装飾付大刀については、実物の丹念な検討を通して、環頭部・把・鞘の構造的諸特徴が明確に分類・定義された点が評価される。そうした検討成果を手がかりとしておこなわれた、新羅・百済・大加耶における装飾付大刀の分類とその時空的位置づけは、説得力あるものとなっている（第5～7章）。

上記の朝鮮半島における様相の検討結果をもとに、日本列島各地で出土した垂飾付耳飾と装飾付大刀の受容および展開過程について、新たな見解を提示した点も評価される。垂飾付耳飾については、その形状と技術的な特徴の検討を通して、朝鮮半島各地から持ち込まれたと考えられる例が指摘された。また、日本列島において最も類例が多く、その系統と製作地について意見が分かれていた長鎖式耳飾については、その

製作時期と垂飾の形状の違いなどから、日本列島に渡来した工人により日本列島内で製作された、と結論づけた点も注目される（第4章）。

装飾付大刀については、まず、日本列島内における本格的な生産が開始される以前の段階にあたる、古墳時代中期前半から後期前半にかけての出土例について、朝鮮半島における類例との比較検討をおこなった。その結果、古墳時代中期前半は新羅、中期後半は百済から持ち込まれた例が大半であるのに対して、大加耶からの搬入例は後期に急増することを明らかにした（第8章）。6世紀に日本列島で出土例が増加する単龍・単鳳環頭大刀については、環頭部の鑄造技法の詳細な分析を通して、大加耶から渡来した工人が日本列島で製作を開始したことを立証した。さらに、工房の様相が変化していく中で、6世紀後葉以降、日本列島特有の大刀群を量産するようになるまでの過程を具体的に復元した（第9章）。

以上の研究をまとめた終章において、論者は朝鮮半島南部における垂飾付耳飾と装飾付大刀の生産・流通・使用の様相の変遷をⅠ期～Ⅳ期に整理した上で、形態的特徴および製作技術の広がりを手がかりとして、当時の地域間交渉の特質と変遷を総合的に論じた。この結論は、十分信頼に足るものであり、今後、日本および大韓民国における当該研究に大きく貢献することになるであろう。

古代日朝関係史の考古学的研究を進める上で、朝鮮半島における考古資料の時空的位置づけが不十分であるために、日本列島出土例の理解にも意見の相違が生じてきた。地道な遺物調査をもとに執筆された本論文は、そうした従来の研究の限界をこえ、日本のみならず大韓民国における考古学研究にも十分に貢献しうる成果をあげている。今後、同様の方法を用いて、その他の金工品の研究を進めることにより、考古資料を通した古代日朝関係史研究がさらに深められることを望みたい。

ただ本論文には、さらに検討されるべき課題も存在する。中でも、考古資料に対する詳細な分析が進められた一方、その歴史的解釈に踏み込むことを控えた点が惜しまれる。今回の遺物の分析結果には、従来の歴史観の見直しをせまるものが含まれている。今後とも実証的な研究を進める中で、古代日朝交流に対する具体的かつ新たな歴史観が示されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。